

地下茎の伸長をどうして止める？

松本 茂

(本会会員・榎高石造園土木取締役技術部長)

「竹が広がって困るとか、「竹は好きだが、植えると他のところまで広がってしまうので植えるのをためらっている」という相談をよく受ける。

どうすれば望む所に、美しく竹を生やして育てることができるか。それにはやはり地下茎が他のところに出ないように「囲い」を儲けるのがよい。この「囲い」を遮根板と称している。

遮根板の材料としては、厚さ十二センチ五センチの鉄筋コンクリート壁、土木用遮水シート（塩ビ製、ゴム製 一ミリ一・五ミリ）、屋根用ロール平板（F・R・P製、プラスチック製、アクリル製 一ミリ位）などがある。

それらと比べると、鉄筋コンクリート壁は植栽する場所を最も自由な形で囲めるが、費用、及び工事期間が長くかかる。

遮水シートと屋根用ロール平板を比べると、前者は柔らかく、施工中に自立しないが隣接する建造物の形に合わせやすい。後者は施工中に自立するが、鋭角には曲げられず、

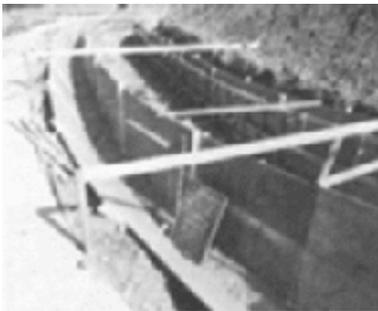
又、手荒く扱ったりひびが入ったり、割れたり、破損しやすい。両者とも、埋め戻しの際に石など尖った物が直接触れない様に注意しなければならぬ。接合部は接着剤、両面テープ（ブチルゴム製が望ましい）などで隙間なく接着する。隣接する建造物と接合したい時は、より丁寧に作業を行う必要がある。些細な隙間からでも地下茎は、囲いの外へ伸びる。私の経験では、両方とも隣接する建造物との完全な接合は無理だった。建造物と接する所は、その建造物と接着させるのではなく、竹の周

囲を完全に囲んだ方がよい。鉄筋コンクリート壁の場合も、他の建造物との接合部に隙間が出来ない様、特に注意する。コンクリート壁になぜ鉄筋を入れなければならぬかという点、無筋であるとひび割れが生じることがあり、その隙間から地下茎が外へ伸びるからである。

掘削、埋め戻しの土木作業は別として、鉄筋コンクリート、土木用遮水シート、屋根用ロール平板の三者の施工費を比較すると、施工場所にもよるが、一般的に約十二：一：二という比率になる。それぞれの長所と短所を考え、それぞれの場所に合った材料を選ぶ必要がある。

どの方法でも掘削の深さは、大型の竹では一メートル位、中型、小型で六十センチは必要である。竹の地下茎は地表の方へと伸び、集まる傾向があり、通常はそんなに深い所まで伸びないが、遮根板を設置した際、土を掘り返す事に

<鉄筋コンクリート製>



型枠組 鉄筋組の施工



設置完了 中仕切りはF.R.P製



完成後 壁が地上より立ち上がっている

<F. R. P. 製>



立て込み時にF.R.P.は自立する



ブルチルゴム製両面テープでの接続



設置完了 埋め戻し時に破損しないように注意する。

より遮根板の所の土壌条件が良くなり、下方まで深く地下茎を伸ばす事が考えられるからである。又、遮根板は地上から二十程程出して立てる必要がある。特に地下茎が伸びて遮根板の様な障害物に当たると、それに沿って上に伸びる事がある。

遮根板の地上に出た部分については、鉄筋コンクリート壁の場合そのままの状態でも良いし、修景的に化粧を施す事も容易である。土木遮水シートはそれ自体自立しないので、外に堅い物、例えばコンクリート・石材・木材等で挟んで立てる必要がある。屋根用ロール平板は自立はするが物に当たったり、触れたりすると割れることがある。また遮水シートも日光が当たり年月が経過すると劣化し割れるようになる。その点からも修景的にも他の物で覆う必要がある。また、設置場所が斜

<塩ビ製>



設置途中 設置時に塩ビは自立しないので板で支える



設置完了 地上部分も自立しない



地上に出た部分の保護及び修景的化粧のために石を並べた例

面とか囲む形が複雑になれば施工は、鉄筋コンクリート壁、土木用遮水シート、屋根用ロール平板の順で難しくなる。竹の植栽地を遮根板で周囲を囲むことが困難な場合、その終った所から中の地下茎が外へ伸びて行ったり、また逆に外の竹の地下茎が伸びて来たりするので、注意する必要がある。遮根板を設置せずに地下茎が延びるのを防ぐ方法の一つに、深さ六十程程の溝を掘り

水を流す方法があり、地下茎はその溝を越える事はない。他の例として、芝生地の中にハチクを植えた例がある。この例では芝刈り作業を年四回行うので、その度に望まない筍や地上に出てくる地下茎を切断できる。したがって、容易に繁殖の管理ができる。ただし、この方法は一種類の竹を植えたときに可能であり、異なった種類の竹を近い所に植えたときには混生するので、この方法は適当でない。

なお、遮根板が埋設してあつても地下茎の広がりを完全に止めるのは難しく、他の所に筍や地下茎が出ていないか良く点検する必要がある。もし囲いの外に出てくる様な事があれば、支給に対策を講じなければならぬ。そのまま放置しておく、遮根板を設置した意味がなくなる。毎日竹に声を掛け、観察する事が美しい竹林を作り出す原点と考える。